

栄西の入滅とその周辺

館 隆 志

はじめに

栄西（一一四一～一二一五）は比叡山の僧侶であったが、二度目の在宋中に臨済宗黄龍派の禪を相承していた。帰朝後は、天台宗僧侶である傍ら禪を積極的に布教した時期もあつたが、日本達磨宗の大日房能忍と同時に禪の布教停止を受けている。以降、栄西は最澄（七六七～八二二）が四宗相承した円密禪戒の一つとして、天台宗の中で禪の布教を展開した。

そのため、残された史料からは栄西を禅僧として評価するよりも、「持律持戒の律師であり、葉上流の密教僧であり、顕密二教の碩徳であり、僧正の位に昇った鎌倉初期の高僧」^①と評価する方が的を射ている様に思われる。栄西を禅僧たらしめるのは、その時代の記録からではなく、その門流に参じた道元（一一〇〇～一二五三）を通してであり、あるいは

は後の時代の評価としてである。道元の伝記史料によれば、道元は晩年の栄西に参学したとされている。しかし、これを考察しようにも、栄西晩年の活動はほとんど不明であり、入滅についてさえも諸説が伝えられていた。

栄西入滅の記事は、今回紹介する『大乘院具注曆日記』を別とすれば、『吾妻鏡』建保三年六月五日条に、

六月小五日、癸亥。寿福寺長老葉上僧正栄西入滅、依^②痢病也。称^③結縁^④鎌倉中諸人群集。^⑤遠江守^⑥為^⑦將軍家御使^⑧莅^⑨終焉^⑩之砌^⑪。^⑫

とあるものと、それ以外の史料とに大別される。

この記事を検証したものとしては、貞享二年（一六八五）に刊行された『新編鎌倉志』巻四「寿福寺」があり、寿福寺の「開山塔」の記述の中に、

東鏡ニ、建保三年六月五日、寿福寺長老葉上僧正栄西入滅。痢病ニ依テ也。結縁ト称シ、鎌倉中諸人群集ス。遠江守（親広）

將軍家ノ御使トシテ、終焉砌リニ菫ト有。又元亨釈書ニハ、建保三年、榮西相州ニ在。一日源僕射実朝ヲ辞ス。実朝ノ云、師已ニ老タリ、寺未成。何事ニカ行ヤ。对テ云ク、我王城ニ入テ滅ヲ取ント欲スルノミ。駕ニ命シテ、京師ニ歸リ、微疾ヲ示ス。建仁寺ニ於テ、椅ニ坐シ、安祥ニシテ逝ス。実ニ七月五日ナリ。年七十五トアリ。今按スルニ、東鑑トハ異ナリ。然レトモ、京・鎌倉ノ諸寺、昔ヨリ七月五日ヲ示寂ノ日トス。シカラバ、釈書ヲ以テ正トスベシ。^③

という一文がある。『元亨釈書』の記述を紹介し、さらに「京・鎌倉ノ諸寺、昔ヨリ七月五日ヲ示寂ノ日トス」という理由から『吾妻鏡』の説を正面から否定している。興味深いのは、京の諸寺だけではなく、鎌倉の諸寺も昔より七月五日が入滅の日であったと紹介していることであろう。

『新編鎌倉志』は、延宝二年（一六七四）に徳川光圀（一六二八〜一七〇〇）が鎌倉を訪れた際の記録である『鎌倉日記』を母体として編纂された。この『鎌倉日記』によれば、光圀は五月三日に寿福寺を訪れているが、この時の寿福寺の記録には榮西入滅に関する記事はない。その後の延宝四年（一六七六）、光圀は彰考館員の河合恒久に命じて、鎌倉での現地調査を行なわせた。延宝八年に河合恒久が没した後は、力石忠一がそれを引継ぎ、貞享二年に刊行されたものが『新編鎌倉志』である。

ここに京都の諸寺とあるのは、鎌倉在住の僧侶などから伝聞した情報と考えられるが、鎌倉の諸寺からの情報は、現地における調査結果である。そのため、鎌倉の諸寺には寿福寺も含まれていると考えられ、『新編鎌倉志』が刊行された頃は、当の鎌倉においても『吾妻鏡』の説は肯定し難いものであったらしい。また、あくまで「示寂ノ日」を問題視しており、『新編鎌倉志』では、『吾妻鏡』の記事を参照しつつも、入滅地を鎌倉とは判断していなかったと考えられる。

榮西が開山した京都東山の建仁寺では、『吾妻鏡』が刊行された江戸初期に、榮西の入滅日を七月五日、入滅地を建仁寺としていたとみられる。大宋宝慶元年（一二二五）八月九日に南宋の修職郎監臨安府都稅務の虞樗ぐちよが撰した『日本国千光法師祠堂記』（以下「祠堂記」^⑤）、元亨二年（一二三二）に成立した虎関師鍊（一二七八〜一三四六）の『元亨釈書』巻二「建仁寺榮西」、応永十一年（一四〇四）に明の僧侶である如蘭によつて記された「洛城東山建仁禪寺開山始祖明菴西公禪師塔銘」に、それぞれ七月五日の入滅が記されている。

また、臨済宗大慧派の中巖円月（一三〇〇〜一三七五）の語録『中巖和尚語録』巻下「拈香」^⑦には、康安二年（一二六二）に中巖円月が建仁寺で行なった「千光祖師忌」が収録され

ており、「建保三年七月五日」日の入滅を記している。『中巖月和尚自歴譜』によれば、中巖円月は貞和元年（一三四五）に虎関師鍊より直接『元亨釈書』を拝覧しているので、『元亨釈書』の記述に基づいたという可能性も高いが、いづれにしても一三〇〇年代の建仁寺では七月五日を栄西忌としていたとみなしてよいだろう。

栄西の門流である臨済宗黄龍派としては、龍山徳見（一二八四〜一三五八）の語録で法嗣の無等以倫によって編集され康暦二年（一二三八〇）の序を有する『黄龍十世録』に収録された栄西伝は、『元亨釈書』巻二「建仁寺栄西」とほぼ同じものであり、栄西の七月五日の建仁寺入滅を記している。

臨済宗一山派の天隠龍沢（一四二三〜一五〇〇）は、『翠竹真如集』一で、文明十四年（一四八二）に「建仁寺入寺」の際の「開山諱拈香」で、『祠堂記』を取り上げて「七月五日忌」を記している。

他にも、建仁寺住持を務めた臨済宗幻住派の月舟寿桂（一四六〇〜一五三三）の語録『月舟和尚語録』には、永正十一年（一五一四）の栄西三百年忌に行なわれた香語「開山祖師三百年諱香語」が収録されており、

大日本国山城州東山建仁禪寺、永正十一年歳余甲戌七月五日、
伏値開山千光祖師大和尚三百年忌辰。

栄西の入滅とその周辺（館）

とあり、七月五日を入滅日としていたことが確認される。このように、少なくとも建仁寺においては七月五日の入滅日が受容されていたと考えてよい。

一方、鎌倉の寿福寺はどうであろうか。寿福寺には中世史料がほとんど残っておらず、中世までの寿福寺の栄西忌の記録は確認できない。しかしながら、寿福寺には江戸期に記された『寿福寺略記并諸寮地名記』が現存している。その奥書には、

往古、仏源禪師撰スル所ノ縁起焼失、故延宝二年七月五日、以天譚略記。

とあり、延宝二年（一六七四）七月五日に記されたものである。撰述日が七月五日となっているのは、栄西忌に合わせたものであろう。同書は、「関東五山第三龜谷山寿福金剛禪寺略記」（以下、「寿福寺略記」と「諸堂寮舍并境致」で構成されている。この内、「寿福寺略記」という題名ではあるが、その内容は栄西の略伝である。『元亨釈書』を中心史料としながらも、それとは違った記述が見られ、江戸期の寿福寺でどのような栄西像が受容されていたかを知る上で貴重な史料といえる。「寿福寺略記」は栄西の入滅について、「建保三年乙亥七月五日、示滅於洛之建仁」とあり、七月五日の建仁寺での入滅を伝えている。興味深いのは、「諸堂寮舍并境致」では「東鑑曰」として、『吾妻鏡』を参照してい

る記事が存することである。すなわち、寿福寺では『吾妻鏡』の記事を知りつつも、栄西の入滅を鎌倉とは判断せずに、京都建仁寺と判断していたのである。

また、寿福寺には江戸期に行なわれた栄西忌に関する史料が現存しており、明和元年(一七六四)の栄西の五百五十年忌に関する「寿福寺開山明庵栄西五百五十年諱香資贈進状」、文化十一年(一八一四)の栄西六百年忌に関する「建仁寺開山明庵栄西六百年遠諱結制会香資収納状」、文久四年(一八六四)の栄西六百五十年忌に関する「開山国師六百五拾遠諱助資帳」の三通の文書がそれに当たると見られる。しかし、これらの文書は香資に関するものや助資帳であり、月日の記載が無いため、この史料のみからは栄西忌がその年の何月何日に行なわれたか明確にはならない。

建長寺には江戸期から明治期にかけての建長寺寺務の膨大な記録『福山常住日記』が現存しており、江戸期における関東五山派寺院の具体的な動向が確認できる貴重な史料となっている。¹³⁾ この『福山常住日記』の明和元年六月五日条と明和元年七月四日条によって、栄西五百五十年忌がその年の七月五日に行なわれたことが知られる。¹⁴⁾ また、文化十一年七月五日条の栄西忌の記事によって、栄西六百年忌が七月五日に行なわれたことが確認される。¹⁵⁾

したがって、少なくとも江戸期に行なわれた五百五十年

忌と六百年忌では、鎌倉においても栄西の忌日を七月五日と判断していたのである。六百五十年忌については明確ではないが、しかし、『寿福寺略記并諸寮地名記』と五百五十年忌と六百年忌の例からすれば、江戸期において、鎌倉寿福寺では栄西の入滅日を七月五日と判断していたということには問題がなからう。江戸期において、寿福寺では『吾妻鏡』建保三年六月五日条の記事から、栄西の入滅日を六月五日とは解釈していなかったのである。

また、『禅刹記』や『五山記』などにも栄西の忌日が記されており、江戸時代初期の書写本が残る『和漢禅刹次第』「東山建仁寺」項目の「興禅護国院」には、

建保三年乙亥七月五日入定、七十五歳。¹⁶⁾

とある。また、『扶桑五山記』四「建仁寺住持位次」には、

建保二乙亥七月五日、入定于興禅護国院、号入定塔、寿七十五。¹⁷⁾

とあり、『鎌倉五山記』「相摸州亀谷山寿福金剛禅寺」にも、

世寿七十五、建保三年乙亥七月五日、於建仁寺入定。¹⁸⁾

とある。『扶桑五山記』では建保二年となっているものの、「乙亥」という記述からすれば建保三年の誤りであり、『鎌倉五山記』では建保三年七月五日の建仁寺入滅が記されており、寿福寺を中心とした記述においても、栄西が七月五日に建仁寺で入滅したと記されていることになる。

七月五日を榮西の入滅日とする説は一般的と言え、『大日本史料』第四編之十三には「權僧正法印榮西寂ス」として、建保三年七月五日の記事として榮西入滅の項目が設けられている。しかしながら、その第一として取り上げられているのが『吾妻鏡』の記事であり、その記事の上註には「鎌倉寿福寺ニテ示寂」という一文が添えられている。榮西の入滅地を鎌倉とする説は、いつ頃から挙げられたものであろうか。

江戸期の榮西入滅地と入滅日に関する先行研究諸説

榮西に関する論考や著述は数多あるが、入滅について論及しているものは意外に少ない。榮西の著述や活動から、榮西の思想を探ろうとした場合には、入滅地や入滅日について論及する必要が無いためである。そのため、入滅について論及しているものは、榮西の伝記を扱っているものが主だったものであり、その他、入滅地が京都と鎌倉の二説が存していたことから、榮西の寿福寺や建仁寺における活動に関する論考で触れられる場合がある。また、その晩年に参学したという伝記が残っている道元が榮西に参学したのか否か、すなわち道元と榮西の相見問題に関する論考で扱われる場合が多い。

榮西の入滅とその周辺（館）

『吾妻鏡』に記された記述を基として、榮西の入滅地を鎌倉と解釈する説が、いつから登場しはじめたのかについて断定することは難しい。

まず、江戸初期の鎌倉の紀行集を見ておきたい。澤庵宗彭（一五七三～一六四八）が寛永十年（一六三三）に鎌倉を訪れた際の記録『沢庵和尚鎌倉巡礼記』には、寿福寺について、第三龜谷山寿福寺は実朝の時に建立し、代も先なりけれど十利の位にてありし。後に五山に任せられける故に鎌倉五山の第三に列なれり。千光国師開山祖たり。塔を逍遙庵といふ。²¹⁾

と記した上で、十一月八日に寿福寺を参詣した時のことを、次の日は龜谷山寿福寺に入る。逍遙院も今はなし。逍遙院はあやにくに水かれて草あをし。入定の石龕荆棘かこみ藿藜させり。方丈も今はなし。残りたる一院にいさゝか開山塔をかまへて香灯をそなふ。千光国師の尊僧儼然たり。仏殿もかたばかりの牀なり。²²⁾

とその荒廢の様を記し、寿福寺に「入定の石龕」が存していたことを記録している。

また、大徳寺一八五世の玉舟宗璠（一六〇一～一六六九）が鎌倉を訪れた際の記録で、内容から寛永十九年（一六四二）から寛永二十一年（一六四四）が撰述年時と推定されている『玉舟和尚鎌倉記』には、

一、寿福寺 扇ノ谷ニアリ。浄光明ノムカイニ当テアリ。五山

第三番目也。仏殿アリ。本尊釈迦・文珠・普賢、イヅレモ籠ニテ作り、其上ヲ上ニテヌリ彩色ヲシタル者也。

積翠庵 開山塔也。開山千光國師ノ木像アリ。頂、甚ダ長シ。積翠ノ後ニ、千光入定ノ岩窟アリ。定ノ口ニ階ノ如クニシテ今ニ堅ク閉テ有之。窟ノ内ニハ古ヘ画ヲカキタル跡アリ。故ニ絵書槽ト云ナラハス也。是ノ前ニ石塔アリ。千光ノ塔也ト云フ。但五輪也。

とあり、「千光入定ノ岩窟」の存在を記している。

一方、撰者は明確ではないものの万治二年（一六五九）の鎌倉の紀行集である『金兼葉』²⁵においては、

寿福寺 亀谷山寿福金剛禪寺。開山千光祖師。諱榮西、号明庵。嗣法天童虚庵。建仁三年七月五日入定、世寿七十五。本尊釈迦、文殊、普賢。法堂曰「善法」、方丈曰「扶桑興禪閣」〈持氏筆〉、僧堂曰「選仏場」、外門曰「天下古刹」。又有「雪靈廟、〈白山〉長庚嶺（開山行道地星隕焉）独松峰、双碧池、象王窟（安普賢像）、華鯨峰、掃雲洞、碧玉泉、梅鳩池、金竜井」、望「夫石之十境」。大半今不存。

として、この栄西「入定ノ岩窟」について記しておらず、七月五日を入滅日と記すのみである。しかし、前述した水戸光圀の『鎌倉日記』では、

後ノ山ノ上ニ、エカキヤグラトテ、実朝ノ石塔アリ。四方ト上ヲ極彩色ニ、牡丹カラクサナド画キタル巖窟ナリ。今ニタシカ

ニ能見ユルナリ。風霜ニ逢ザル故カ、石燈少シモソコネズ。又祖師塔ノ巖窟一ツアリ。

と記している。『沢庵和尚鎌倉巡礼記』では「入定の石龕」についての詳細は記されていないが、『玉舟和尚鎌倉記』では「千光入定ノ岩窟」について「窟ノ内ニハ古ヘ画ヲカキタル跡アリ」として「絵書槽」の呼称を紹介している。しかしながら、『鎌倉日記』では「エカキヤグラ」に「実朝ノ石塔」が有ることを紹介しつつ、別に「祖師塔ノ巖窟一ツアリ」と紹介していることになる。

したがって、現存する寿福寺の「絵書槽」を、江戸初期に「千光入定ノ岩窟」と称していることから、栄西が寿福寺にて入滅したという伝承が存していたことになる。一方で『鎌倉日記』では「絵書槽」を「千光入定ノ岩窟」とは解していない。とすれば、現在「実朝ノ石塔」が有ることで知られる「絵書槽」は、江戸初期に「千光入定ノ岩窟」と伝承されていたことになる。しかし、江戸初期の紀行集で栄西が寿福寺で入滅したとする伝承の有無は、「絵書槽」の伝承の問題であつて、『吾妻鏡』の記事から栄西入滅地を鎌倉と解釈したか否かという問題とは議論を分けなければならぬであろう。『吾妻鏡』の記述とは別に、江戸初期に栄西が寿福寺で入滅したという伝承が存していたことが確認される。

次に、江戸時代の研究状況を見ておきたい。臨濟宗の学

僧である卍元師蛮（一六二六—一七一〇）撰述で、延宝六年（一六七八）成立の『延宝伝燈録』巻一では、入滅地を建仁寺、入滅日を七月五日としている。同じく卍元師蛮撰述で、元禄十五年（一七〇二）成立の『本朝高僧伝』巻三でも同様である。

また、臨済宗の学僧である無著道忠（一六五三—一七四四）が撰述した『建仁寺志』では、開山である榮西の記述の中で、

建保三年七月五日寂ス、年七十五、臘六十三。²⁷

とあり、入滅地を建仁寺、入滅日を七月五日と判断しており、『吾妻鏡』の記述については触れていない。

他に、建仁寺で住持を勤めた高峰東峻（一七三六—一八〇二）が榮西の關係史料を蒐集した『靈松二枝』では、『吾妻鏡』の榮西入滅記事を紹介しているが、それに対する高峰東峻の見解は記されていない。しかしながら、高峰東峻が『吾妻鏡』や『元亨釈書』などによって榮西の行実を年譜形式でまとめた『千光祖師年譜』²⁸においては、榮西の入滅について『吾妻鏡』の榮西入滅記事は採用していない。また、前述した「洛城東山建仁禪寺開山始祖祖明菴西公禪師塔銘」を、高峰東峻が考証したものを、明治二十二年（一八八九）に再校訂して刊行された『千光祖師塔銘拾遺鈔』では、

其余古徳ノ伝記ニモ聞載タリ。実トハ兼テ披露ノ如クチガヒナ

キ故ニ実ニ七月五日ト云。然ルニ東鏡ニ云、建保三年六月五日寿福寺長老老葉上僧正榮西入滅。依痢病也。称「結縁」、鎌倉中諸人群集。為「將軍家御使」、莅「終焉之砌」云云。諸伝記皆七月五日建仁ニテ遷化トアリ。東鏡ノ説不審ナリ。筆記ノ誤ナルベシ。²⁹

とあり、『吾妻鏡』の記事を「筆記ノ誤」と判断しており、高峰東峻は、『吾妻鏡』の記事に基づいて榮西が寿福寺で入滅したと解してはいなかったとみられる。

このように、卍元師蛮・無著道忠・高峰東峻など江戸時代の著名な学僧は、榮西の入滅地を寿福寺と解していたわけではなかったのである。

次に、江戸時代の地誌のうち、寿福寺の記事を収録するものについてであるが、貞享二年に刊行された『新編鎌倉志』で、榮西の入滅地を鎌倉と解釈していなかったことは既に述べた通りである。江戸後期、文政十二年（一八二九）に植田孟縉（一七五七—一八四三）によって撰述された鎌倉の地誌『鎌倉攬勝考』巻四「寿福寺」の「開山塔」の記述の中で、

東鑑、建保三年六月五日、寿福寺長老老葉上僧正榮西入滅、痢病に依てなり。結縁と称し、鎌倉中の諸人群集す。遠江守親広、將軍家の御使として終焉の砌に莅とあり。然るに、釈書には、京師に帰り、建仁寺にして七月五日寂、年七十五とあり。東鏡

には大に異なり。されとも、七月五日を示寂の日とすることは、京・鎌倉ともに積書によれるにや。³⁰⁾

と記している。『新編鎌倉志』の記事を受けたものと思われるが、鎌倉でも七月五日を入滅日としていたことが記されていることは注目すべきであろう。

しかしながら、天保十二年（一八四一）に成立した『新編模国風土記稿』巻八十九「寿福寺」では、

三年六月五日、栄西当寺にて寂す。曰、三年六月五日、寿福寺長老葉上僧正栄西入滅、依痢病也、称結縁、鎌倉中諸人群集。遠江守親広、為將軍家御使、苳終焉之砌、按ずるに元亨積書には、建保三年七月五日と載せ、又当寺を管せしを、此年にかく、誤りならん。本文總て東鏡に従ふ。³¹⁾

と記しており、当寺すなわち寿福寺で栄西が入滅したと解釈している。そのため、すでに江戸末期には、『吾妻鏡』の記述から入滅地を鎌倉とする解釈が存していたことになる。

明治以降の栄西入滅地と入滅日に関する先行研究諸説

明治期に入ると、鷺尾順敬（一八六八～一九四一）は明治三十四年（一九〇二）の『禅宗史要』の中で、

建保三年六月五日寿福寺に於て遷化せられた。栄西の伝には建保三年七月に京都で遷化した様にあるは事実でない。³²⁾

と記し、明治三十六年（一九〇三）に刊行された『日本仏家人名辞典』の「栄西」の項目においても、

（建保）同三年六月五日寿福寺の方丈に寂す。寿七十五、臘六十三。³³⁾

と記している。『日本仏家人名辞典』「栄西」の出典には、『新編模国風土記稿』は含まれていないため、鷺尾氏が『新編模国風土記稿』に基づき解釈したかは不明であるが、江戸末期以降、『吾妻鏡』の記述に基づき、栄西の入滅地を鎌倉とする解釈がなされるようになっていた。

しかし、明治三十年（一八九七）に刊行された鈴木子順『禅宗眼目』「各本山開祖之略伝」の「建仁寺千光祖師」では、建保三年七月五日也。世寿七十五。法臘六十三。³⁴⁾

と記され、明治三十二年（一八九九）に在家向きに刊行された平田真道『在家安心・臨済宗要義』では、栄西について、建保三年七月五日寂を示せり。³⁵⁾

と記されている。鷺尾氏は栄西が鎌倉寿福寺で入滅したと判断しているが、それと同時に臨済宗のことを扱った書物には、七月五日の入滅を伝えているのである。

そのため、栄西が鎌倉で入滅したとする説は、この時点では一般的な説にはなっていないようである。鷺尾氏が、なぜ栄西の入滅地を寿福寺と判断したのかは明確ではないが、『日本仏家人名辞典』において、寿福寺が栄西の入滅地と判

断したことは、その後の議論に一定の方向性を与えたように思われ、明治四十一年（一九〇八）に刊行された孤峰智璿（一八七九～一九六七）の『日本禅宗史要』においても、

翌二年には政子の本願に依り龜谷に寿福寺を開き、始めて禅風を関東に伝ふ。三年六月五日同寺に於いて痢病に罹りて寂す。³⁶として、寿福寺での入滅が記されている。

また、同じく明治四十一年に刊行された『国史大辞典』では、

七月五日寿福寺に於て寂す。³⁷

と記し、七月五日という入滅日を採用しつつも、入滅地については寿福寺との説を提示している。

栄西の伝記を扱ったものに絞ってみると、大正二年（一九一三）に刊行された『東山建仁略寺誌』『祖師行状』³⁸には、『元亨釈書』や『沙石集』に基づき七月五日の京都での入滅を記している。ただし、これは栄西の七百年遠忌に因んで建仁寺より発行されたものであり、あくまで建仁寺を主眼として編纂されたものであるから、この時点で栄西の京都入滅説が主流であったとは言えない。

また、同じく大正二年に『栄西禅師記念号』と題して『禅宗』第二百十八号が刊行されているが、これに収録された上村観光『千光祖師年譜』³⁹では、七月の箇所に「五日、栄西寂ヲ示ス」として、入滅地を鎌倉とは記しておらず、出典として『吾

妻鏡』『元亨釈書』『千光祖師略年譜』を挙げるのみである。

ところが、大正五年（一九一六）に刊行された木宮彦彦『荣西禅師』に、

越えて建保三年六月五日、寿福寺に於て寂を示された。寿七十五、臘六十三、結縁と称して、鎌倉の諸人、寿福寺に群集し、幕府遠江守親広を遣はして厚く之を弔はれた。そこで遺弟等相謀つて茶毘に附し、舍利を京都に送り、興善護国院に収め、塔を入定といふた。之は東鏡の説に拠つたのであるが、元亨釈書には京都に於て示寂せられたやうに書いている。即ち同書巻二に云く、（引用にて中略す）この他、沙石集、明庵西公塔銘、千光祖師略年譜、本朝高僧伝、延宝伝燈録等、皆七月五日京都に於て示寂せられたとしてある。けれども史料の軽重から云へば東鑑の説を探るべきであらう。⁴⁰

とあり、『吾妻鏡』の記述を基に栄西入滅の異説が記されている。しかも、木宮氏は、「建保三年六月五日、寿福寺に於て寂を示された」として、栄西の鎌倉寿福寺の入滅を明記した。

その後、昭和十八年（一九四三）に刊行された伊藤古鑑『荣西』でも、

栄西の入滅の地に就て、鎌倉といふ説と、京都といふ説と両説伝つてゐる。これは、もちろん、鎌倉といふ説が確実とみなければならぬ、それは信すべき史料として『吾妻鏡』に、次ぎの

ような記事があるからだ。（引用により後略）^④

として、『吾妻鏡』を重視し、その上で栄西の入滅地を鎌倉と明記している。

その後この説は定着し、昭和二十四年（一九四九）に刊行された辻善之助『日本仏教史』第三卷中世編之二においては、

建保三年（一一七五）七月五日、痢病によって寿福寺で寂した。

実朝が中原親広を遣して弔った事が、吾妻鏡に見える。沙石集には京に上って臨終つかまつらんとしたが、年長けて上洛わづらはしく侍り、いづくにても御臨終あれかしと仰せられたけれども、聴かずして上洛し、七月四日最後の説法してはてたとあるが、吾妻鏡に鎌倉で寂したといふが確かであらう。^⑤

として紹介されるようになり、入滅日は七月五日としつつも、入滅地は寿福寺と判断している。前述した『国史大辞典』の説を受けたかと思われるが、この時点では寿福寺で入滅したとするのが定説の如く扱われるようになっていた。

そのため、昭和三十四年（一九五九）に刊行された『鎌倉市史』社寺編「寿福寺」の項目では、

その示寂の地には二説が生じた。『吾妻鏡』はこれを鎌倉とし、『元亨釈書』・『沙石集』・『洛城東山建仁禅寺開山始祖明菴西公禅师塔銘』その他はすべて京都とする。既に先人の説かれるように（鷺尾順敬・伊藤古鑑・辻善之助の諸氏）『吾妻鏡』の説

が正しからう。同書建保三年六月五日の条に痢病によって入滅し、鎌倉中の人々が結縁のために群集したことがみえている。^⑥として、鷺尾順敬・伊藤古鑑・辻善之助の先行研究を基に寿福寺にての入滅を記している。

昭和四十年（一九六五）、栄西研究の基本書の一つとなる多賀宗準『人物叢書』栄西が吉川弘文館の人物叢書の一つとして刊行された。この中では、

建保三年（一一二五）栄西は七十五歳の高齢をもって活動と栄光と抱負との生涯をとじた。

その入寂の日と土地とその状況とについて異説あることは周知せらるるところである。日については六月五日説（『吾妻鏡』）と七月五日説（『沙石集』『釈書』『塔銘』等）とあり、その場所については鎌倉（『吾妻鏡』）と京都（『沙石集』『釈書』『塔銘』等）との二説がある。

すなわち『吾妻鏡』は建保三年六月五日条にかけてその入寂のことを記し、その際、寿福寺に結縁のために諸人群集し、將軍実朝は遠江守大江親広を使者として臨終を見舞わせた、とある。

一方『沙石集』は七月五日のこととしている。鎌倉に在った栄西が京に上って臨終をとると言い、実朝が、老齢の故をもって留めたにも拘わらず、「遁世ひじりを世間にいやしく思あひて候ときに往生して京童部に見せ候はん」といって上京し、京

都で入寂した、と記されている。

『釈書』も『沙石集』と大体同じく(中略)

栄西の入滅の諸事情を明らかにするについてはなお別のきめ手が必要であろう。⁽⁴⁴⁾

とし、『吾妻鏡』とその他の史料に挙げられた入滅に関する二説を並記し紹介している。

その後、昭和五十二年(一九七七)に「日本の禅語録」第一巻として刊行された古田紹欽『栄西』では、

栄西の入滅年時についていえば、『吾妻鏡』は建保三年(二二二五)六月五日鎌倉においてとするに對して、栄西伝としては信頼に足る『元亨釈書』は同年七月五日建仁寺においてとして、その説を異にすることである。『元亨釈書』の説は『沙石集』にいつている七月五日の京都入寂説を受けているものであろうが、『吾妻鏡』、『元亨釈書』共にその終焉の模様を如実に記し、そのいずれとも一方に決定するきめてはなく、きめてのない限り、この両説に従うより外はない。⁽⁴⁵⁾

とあり、昭和六十一年(一九八六)の菅沼晃『栄西・白隱のことば』では、

一般に歴史家は『吾妻鏡』の説を取り、建仁寺では『元亨釈書』や『塔銘』によって、七月五日建仁寺入寂説をとっています。⁽⁴⁶⁾

とあり、また、平成二年(一九九〇)の高野澄『栄西―京都・宗祖の旅』では、

建保三年(二二二五)、栄西は七十五歳でなくなりました。亡

くなった月日や場所については、二つの説があります。『吾妻鏡』などは六月五日に鎌倉の寿福寺で亡くなったとし、『沙石集』や『元亨釈書』は七月五日に京都で亡くなった、としているのです。⁽⁴⁷⁾

と記しており、多賀宗準『栄西』が刊行されて以降、栄西を総括的に扱う著述においては、入滅地と入滅日を二説並記することが定着しつつあるように思われる。そのため、平成四年(一九九二)に刊行された『国史大事典』卷十三「明庵栄西」の項目においても、

建保三年六月五日に『吾妻鏡』は寿福寺に寂したと記し、『元亨釈書』『明庵西公禪師塔銘』『沙石集』『延宝伝燈録』は七月五日建仁寺に寂すと記す。⁽⁴⁸⁾

として、二説を並記しており、二説の並記はすでに一般的となつていることが伺える。

ここで重要となるのは、いずれの説にしても『吾妻鏡』の記述を基に鎌倉にて入滅したと記していることであろう。これらのことを総合して考察するならば、『吾妻鏡』建保三年六月五日条から、栄西が鎌倉で入滅したと解釈する説は、江戸末期に提示され、その後に定着していったと言えるだろう。

『吾妻鏡』 僧侶入滅記事の検証

僧侶が亡くなることを入滅という。あるいは、禅僧であれば示寂とも言い、浄土系の僧侶であれば往生などとも言う。その他、様々な呼称があるが、『吾妻鏡』では、基本的には「入滅」という呼称が用いられているようである。在家の人が後に出家した法師などの場合は、「卒」とか「卒去」などと呼称されている。また、亡くなり方が異例である場合は、入滅とは呼称されていない。例えば、法住寺殿合戦で亡くなった天台座主の明雲や円恵法親王に対しては、入滅と記されていない。あるいは、突然亡くなった場合は「頓滅」などと呼称される。公暁は実朝暗殺後に殺害されているが、この場合も入滅とは呼称されていない。この他、様々な例を挙げることができるが、いずれにしても、僧侶が、通常の亡くなり方をした場合、『吾妻鏡』では「入滅」と呼称されていたのである。

そこで、「入滅」と記された記事を『吾妻鏡・玉葉データベース』⁽⁴⁹⁾を使用して検索し、その中から僧侶死没の記事を抽出し、これを、『大日本史料』や『史料総覧』などの情報を中心に、傍証史料を挙げて考察していきたい。まず、僧侶名を挙げ、次に所属した寺院名、『大日本史料』『史料総覧』の該当箇所を挙げる。次いで、『吾妻鏡』の記事を引用し、『大日本

史料』から順に傍証史料を挙げ、若干の検討を試みたい。『大日本史料』にない史料は、その末に付した。

①日恵 園城寺 『史料総覧』三、六六四頁

『吾妻鏡』養和元年（一一八一）十二月十一日条

十一日癸丑。帥公日恵入滅。日来煩_レ腹中。今夜、則葬_レ于山内辺。武衛御哀傷之余、自令_レ向其茶毘所_レ給。是園城寺律靜房日胤門弟、顕密兼学浄侶也。去五月、尋_レ先師旧好_レ令_レ参向_レ之間、有_レ御帰依、云云。

②安能 鎮西安楽寺

『吾妻鏡』文治二年（一一八六）八月十八日条

十八日壬辰。鎮西安楽寺別当安能。依_レ有_レ罪科、二品頼令_レ憤申_レ給之処、去六月廿六日入滅之間、以_レ大法師全珍_レ、可_レ被_レ補_レ彼替之由、被_レ執_レ申之、云云。

③性我 勝長寿院 『大日本史料』四之六、五五一頁

『吾妻鏡』正治二年（一一二〇）三月二十九日条

廿九日甲申。勝長寿院前別当恵眼房阿闍梨入滅。

『血脈類聚記』七

性我阿闍梨、四十二、恵眼房、高雄住僧、後住_レ鎌倉、

正治元年月日卒、五十。

性我（恵眼房）の入滅年時については、『吾妻鏡』では正治二年とするも、『血脈類聚記』では正治元年としている。

④円暁 園城寺 『大日本史料』四之六、七〇〇頁

『吾妻鏡』正治二年(一一〇〇)十月二十六日条

廿六日己酉。晴。鶴岡八幡宮別当法眼円曉(号宮法眼)入滅。

『鶴岡社務記録』乾

十月廿六日、円曉入滅。

『鶴岡八幡宮社務職次第』円曉

正治二年(庚申)、十月廿六日、円曉入滅(五十六)

『鶴岡八幡宮社務次第』乾、円曉

正治二年十月廿六日入滅。

⑤經玄 永福寺 『大日本史料』四之十二、七二〇頁

『吾妻鏡』建曆三年(一一一三)九月十八日条

十八日乙卯。天晴。戌刻。永福寺別当美作律師經玄入滅。
依三日來痢病也。

⑥道法 仁和寺 『大日本史料』四之十三、三一二頁

吉川本『吾妻鏡』建保二年(一一二四)十二月二日条

二日壬辰。霰降。京都使者参着。去月廿一日未剋、高陽院仙洞有失火。但打消之間、兩宇之外不_レ燒。同日

亥刻、仁和寺御室(道)御入滅(御年四十九)、云云。

『仁和寺御日次記』

十一月廿一日辛巳、二品法親王薨給(御年四十九)。

『皇帝紀抄』七

建保二年十一月廿一日入滅(年四十九)

『百練抄』十二

十一月廿二日。今夕、仁和寺御室道法親王御入滅。

『仁和寺謝法記』

(建保)同十二月廿一日御入滅(四十九)。

『東寺文書』甲号外三、二十八号「仁和寺御室次第」

建保二年十一月二十一日薨、四十九

『仁和寺御伝』

同十一月廿一日御入滅、四十九

『御室相承記』乙

(十一月)同廿二日、戌刻、御遷化、春秋四十九、

『華頂要略』百四十「諸門跡伝」一

建保二年十一月廿二日薨(四十九歲)

『本朝高僧伝』五十四

建保二年十月某日順世寿算四十九、

『伝燈広録』広沢方、伝法嗣祖流派分一之五余

建保二霜月二十一薨、四十有九、

〔使者〕十一月二十一日(十二月二日)。十二日間

道法は、京都で入滅したらしい。このことは、吉川本『吾妻鏡』においても、京都からの使者によつてその知らせが鎌倉に届いていることによつても確認される。その間、入滅したその日を含めて十二日間を要している。『百練抄』のみが、二十二日の入滅を伝えている。

⑦榮西 建仁寺 『大日本史料』四之十三、六五二頁

『吾妻鏡』建保三年（一二二五）六月五日条

六月小五日、癸亥。寿福寺長老葉上僧正榮西入滅、依痢病也。称「結縁」鎌倉中諸人群集。遠江守為「將軍家御使」莅「終焉之御」云云。

『武家年代記』下、裏書

（建保三年）七五、西寂。勅賜千光国師。

『塵添壺囊鈔』一、五月子事

七十五歳、建保三（乙亥）年、七月五日入滅

『沙石集』十、建仁寺本願僧正事

七月四日、明日ヲハルベキ由披露シ、説戒目出クシ給ケリ。人々最後ノ遺戒ト思ヘリ。公家ヨリ御使者アリケルニ、客殿ニシテ御返事申テ、ヤガテ端坐シテ化シ給ニケリ。門徒ノ僧共ハ、ヨシナキ披露カナト思ヒケルホドニ、同キ五日、安然トシテ化シ給ヒケリ。

『禅林僧伝』一「日本国千光法師祠堂記」

臨終預期、両手結印、安坐而化、寿七十五、臘六十二（中略）、為「七月五日忌」設「具飯」衆本孝也。

『元亨釈書』二、伝智一之「建仁寺榮西」

晡時坐レ椅、安祥而逝（中略）、実七月五日也。年七十五、臘六十三。

『禅林僧伝』一「洛陽東山建仁禅寺開山始祖明庵西公禅師塔

銘」

至「晡時」坐レ椅安祥而逝（中略）、実七月五日也。年七十五、臘六十三。

『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禅寺」

建保二年乙亥七月五日入「定于興禅護国院」、号入定塔、寿七十五。

榮西の場合、『吾妻鏡』以外の史料では京都の入滅を伝えられているが、『吾妻鏡』では入滅地は記されていない。また、これに関連する飛脚・使者・伝聞等の記述はない。

⑧公胤 園城寺 『大日本史料』四之十四 一〇三頁

吉川本『吾妻鏡』建保四年（一二二六）閏六月二十九日条

廿九日辛巳。去廿日未刻、前大僧正法務公胤入滅（年七十二）。有「往生瑞」之由、今日風聞。是將軍家御帰依僧也。故前幕下殊有「仰置之旨」、云云。

『寺門記』所収「園城寺長史次第」

建保三年閏六月廿四日滅、七十二。

『続群書類従』所収「園城寺長史次第」

建保三年壬六月廿四日滅、七十二。私云、黒谷伝記云、建保四年閏六月廿日、於「禅林寺辺」、公胤寂、七十二歳云々。

『寺門伝記補録』卷十四「長吏高僧略伝下」

（建保）四年六月二十日、入寂。年七十有二。

『浄土伝灯絵系譜』

建保四年六月廿日、七十三歳寂。

『園城寺伝法灌頂血脈譜』

建保四年一六一廿、卒、七十二。

『本朝高僧伝』

建保四年閏六月二十日、齡八十余、奄然而寂。

『華頂要略』卷百四十五「如意寺」

建保四年閏六月廿六日寂（八十余歳）。

『東寺文書』所収「園城寺長史次第」

建保四年閏六月廿八日、七十二。

〔風聞↓閏六月二十日〜閏六月二十九日。十日間〕

公胤については、入滅に諸説があり、傍証史料によつて検討することは難しい。『吾妻鏡』では、建保四年閏六月二十日に入滅し、その風聞が六月二十九日に鎌倉に伝わったことになっている。風聞とあるが、その期間は十日間であり、基の情報については、飛脚で伝わらない限り、その情報が鎌倉に伝聞することはない。前述の⑥道法や、後述する⑭親敵の場合と比較しても、その期間は短く問題がないわけではない。

⑨定暁 園城寺 『大日本史料』四之十四、三七四頁

『吾妻鏡』建保五年（一二二七）五月十一日条

五月大。十一日戊子。晴。申剋。鶴岳八幡宮別当三位

僧都定暁煩腫物入滅。

『鶴岡社務記録』乾

五月十一日、定暁入滅

『鶴岡八幡宮寺供僧次第』上

建保五年帰寂。

『鶴岡八幡宮寺社務職次第』定暁^尋

（建保）同五年（丁丑）、五月十一日入滅、腫物。

⑩慶幸 園城寺 『大日本史料』四之十五、三八三頁

『吾妻鏡』承久二年（一二二〇）一月十六日条

十六日丁未、丑剋。月入太徽宮中。辰刻。鶴岳別当

三位僧都慶幸入滅（年、去年八月廿一日補別当。世

号之一年別当）。

『鶴岡社務記録』乾、

正月十六日辰刻、入滅。

『鶴岡八幡宮寺社務職次第』慶幸^尋

承久二年（庚辰）、正月一日（辰刻）入滅。

慶幸は、一月十六日なのか、一月一日の二説が存するが、どちらが正しい情報かは明確にはできない。

⑪親慶 園城寺 『大日本史料』五之二、三五四頁

『吾妻鏡』貞応三年（一二二四）七月二十四日条

廿四日己未。霽。自去四日、至今日、連夜天変出見。

仍国土安穩御祈禱等被始行之。鶴岡供僧奉仕之。

未剋。勝長寿院別当内大臣僧都親慶入滅。(五十六、内大臣忠親公息)。

『園城寺伝法灌頂血脈譜』真田前大僧正授五十九人、

親慶(中略)元仁元一七一七廿五卒、

親慶については、『吾妻鏡』では七月二十四日、『園城寺

伝法灌頂血脈譜』では七月二十五日と伝えている。ただし、

入滅が夜であった場合、前日の夜なのか、当日の朝と判断

すべきかという問題があり、一日ずれて伝わる例は多々あ

るので、それ程問題にすべきではないだろう。

⑫貞暁 高野山 『大日本史料』五之六、三〇七頁

『吾妻鏡』寛喜三年(一一三二)三月九日条

九日乙未。霽。六波羅飛脚到来。去月廿日、仁和寺法

印御房(貞暁、四十六)、於高野御入滅、云云。是幕

下將軍御息、御台所御伯父也。仍御輕服之間、入御竹

御所。

『吾妻鏡』寛喜三年六月二十二日条

廿二日丁丑。高野法印(貞暁)去二月廿二日被入滅訖。

『明月記』寛喜三年三月三日条

今日聞、貞暁法印(鎌倉右大将息、年四十六)逝去、

及廿年籠居高野山(不食病臨終正念云々)。

『高野春秋』八

二月廿二日、鎌倉法印(貞暁上人)、円寂于經智坊(又

号称寂靜院)。

『系図纂要』清和源氏一

寛喜三年、二ノ廿二寂(四十六)

『血脈類集記』八

寛喜三年二月廿日卒(四十六)

『仁和寺諸院家記』勝宝院

寛喜三年二月廿二日、於高野入滅(四十六)

『伝燈広録』広沢方、伝法嗣祖流派分一之五余

寛喜三月、臥病床不得起、二十三日寂靜院而滅度、

四十六。

『紀伊統風土記』

寛喜三年二月二十二日、無疾逝去。

〔飛脚〕入滅二月二十二日(六波羅からの飛脚) 京都三月

二・三日(三月九日)

貞暁の場合、二月二十日、あるいは二十二日に高野山で

入滅するも、『明月記』によれば京都の藤原定家を知った

のは三月三日であり、その情報が伝わるまで十日以上を要

している(二月は小の月)。「吾妻鏡」では、三月九日に六

波羅からの飛脚が到着とあるので、二日か三日頃に貞暁入

滅の情報が京都にもたらされたものと推定される。そこで、

六波羅から飛脚を出し、その情報が約一週間後の三月九日

に鎌倉に知らされたと考えられる。貞暁が入滅してから鎌

倉に情報が届くのにはやや時間がかかっているように思われるが、『明月記』の記事により、その情報が京都に届くまでにすでに相応の時間がかかっていたことが確認されるため、同記事内容の信用性は高い。ただし、『吾妻鏡』においても、二十日と二十二日の二説が存するため、どちらが正しい情報であるか断定することはできない。

⑬ 観基 『大日本史料』五之七、七八三頁

吉川本 『吾妻鏡』寛喜四年（一二三三）三月十五日条

十五日丙申。権大僧都観基入滅。大宮大進行頼孫、土佐守源国基子也。去承久元年為將軍家御持僧。下向云云。

『皇代曆』四、後堀河天皇

三月十四日、法印権大僧都寛喜入滅（四十八）。

観基の場合、三月十五日と十四日の二説が存する。ただし、先に挙げた親慶の場合と同じく、前日の夜なのか、当日の朝と判断すべきかという問題があり、一日ずれて伝わる例は多々あるので、それ程問題にすべきではない。

⑭ 親厳 東寺 『大日本史料』五之十、九一三頁

『吾妻鏡』嘉禎二年（一二三六）十一月十五日条

十五日戊辰。有評儀。是去二日、東寺長者親厳僧正入滅、以鶴岡別当僧正定豪、可レ為其替之由、殿下内御教書、昨日到来之間、可レ被上洛。否有沙汰。

而補長者、為関東眉目、為僧正本意。可レ然之由治定云云。仍自当座遣大和前司、佐藤民部大夫等、被触仰事由於僧正、云云。

『東寺長者補任』三

嘉禎二十一月二日卒（八十六）。

『華頂要略』百四十所収『諸門跡伝』一、随心院

嘉禎二年十月二日寂、号唐橋僧正。

『諸門跡譜』上、随心院

嘉禎二十月二日寂

『東大寺別当次第』九十八、法務大僧正観厳

嘉禎二年十一月二日入滅。

『血脈類集記』七

嘉禎二年十一月二日卒。

『真言列祖表白集』親厳（十一月二日）

嘉禎二年十一月二日入滅。

『本朝高僧伝』五十四、感進四之九「京兆東寺沙門親厳伝」

（嘉禎二年）是歳十一月二日、奄爾順世。

〔十一月二日〜十一月十四日。十三日間〕

親厳の入滅は、嘉禎二年十一月二日である。その情報が鎌倉に伝わったのは、十一月十四日なので、その間は十三日間を要していることになる。入滅地の明記はないが、伝達の日数からすれば京都方面であったと判断される。『華頂

要略」と『諸門跡譜』は、十月二日の入滅を伝えているが、両史料の成立年次からしても、十一月二日であったと判断してよい。

⑮定豪 東寺・仁和寺 『大日本史料』五之十一、九五〇頁

吉川本 『吾妻鏡』嘉禎四年(一二三三) 九月二十四日条

廿四日丙申。晴。弁僧正定豪入滅。去年補東寺長者。

不_レ経幾旬月、云云。是民部少輔源延俊男、兼豪法印入室灌頂弟子也。

『東寺長者補任』三、長者大僧正定豪(法務)

曆仁元年九月廿四日卒(八十七)

『皇代記』四、四条天皇

廿四日、大僧正定豪_本婦寂(八十六、東寺一長者)

『鶴岡八幡宮社務職次第』定豪

(嘉禎) 同四年戊戌、九廿四、於_二京都_一婦寂(八十七)。

『仁和寺諸院家記』華藏院(聖惠親王禅室) 定豪大僧正(号

弁□□、民部少輔延俊息、兼豪法印附法、住_二関東_一)

(曆仁元年) 同九月廿四日入滅(八十七)

『明王院縁起』相模

嘉禎四年戊戌九月廿四日、於_二京都_一遷化、八十七歳。

『血脈類重集』六、兼豪法印権大僧都

嘉禎四年九月廿四日卒(八十七)

『血脈類重集』八、法印定豪、付法十人、六十二、裏書

(嘉禎四年) 同九月廿四日卒(八十七)

定豪が入滅したのは嘉禎四年九月二十四日である。『吾妻鏡』には入滅地は記されていないが、『鶴岡八幡宮社務職次第』や『明王院縁起』には京都での入滅を伝えている。他に傍証史料は存しないが、鎌倉側の史料で京都の入滅を伝え、京都側の史料で入滅地を記していない以上、京都での入滅であったと判断して問題はない。

『吾妻鏡』において、該当日の記事に入滅の記事が記されており、その上、入滅地が明記されていない場合であっても、それは鎌倉での入滅を示しているものではないことが知られる。すなわち、同記事はその時代に起こった一般的な事実が記されているだけだと判断される。

⑯信恵 東寺 『史料総覧』四、六二五頁

『吾妻鏡』延応元年(一二三九) 二月十六日条

十六日丙辰。天晴。京都使者到着。去七日改元、改_二曆

仁二年_一為_二延応元年_一、_二經範朝臣撰_一進之、云云。又去

月十九日、侍從僧正信恵入滅、云々。去年九月廿四日、

弁僧正定豪_本婦寂之後、為_二彼替_一補_二東寺一長者_一、云々。

『東寺長者補任』

長者大僧正真恵、正月廿一日寅剋卒、七十七。

『仁和寺諸院家記』金剛幢院

(延応元年正月) 同廿一日入滅、七十七。

『本朝高僧伝』

(延応元年正月)二十一日化、年七十七。
〔別件の使者〕一月十九日〜二月十六日。〕

信恵は『吾妻鏡』における表記であるが、他伝では真恵である。また、『吾妻鏡』では一月十九日の入滅を伝えているが、他伝においては一月二十一日の入滅を伝えている。

⑰良信 勝長寿院 『史料総覧』四、七九四頁

『吾妻鏡』建長五年(一二五三)五月二十三日条

廿三日庚子。晴。鶴岡八幡宮破壊之間、被_レ加_二修理_一、今日仮殿事始也。又有_二上棟_一。今日、勝長寿院前別当

前権僧正良信入滅、云々(年八十一)。炎旱、被_レ仰_二祈_一雨_一事、阿闍梨(道禪、定清、尊家、親源、良基)。

⑱道禪 園城寺 『史料総覧』五、八頁

『吾妻鏡』建長八年(一二五六)八月八日条

八日丙寅。陰。依_二去六日大風_一、田園作毛等悉損亡之由、近国申_レ之。今日、信濃僧正道禪入滅(年八十八)。

『園城寺伝法灌頂血脈譜』

建長八_一八_一八、卒、八十八。

⑲嚴齋 『史料総覧』五、六〇頁

『吾妻鏡』弘長元年(一二六一)六月二十三日条

廿三日癸丑。霽。相摸禪師嚴齋入滅畢。

『吾妻鏡』弘長元年六月二十七日条

廿七日丁巳。新相摸三郎時村辭_二放生会随兵_一。是去廿三日、兄阿闍梨入滅輕服故也。(後略)

⑳頼兼 園城寺 『史料総覧』四、二三三頁

『吾妻鏡』弘長元年(一二六一)七月十八日条

十八日戊寅。霽。三位権僧正頼兼入滅(年七十七)。大納言師頼脚孫、証遍僧都真弟子、公胤僧正入室受法。

封_二覚朝僧正_一灌頂。蹟密兼学、公家証義、上皇熊野御幸御導師(自_二関東_一被_レ召上)。嘉禎元年十二月十八日、

転_二権大僧都_一(元少僧都)。四年五月廿三日叙_二法印_一(公請勞)。建長六年十二月卅日任_二権僧正_一。八年月日補_二

園城寺別当(于_レ時号_二法性房_一)。『園城寺伝法灌頂血脈譜』

弘長元_一七_一十八、卒、七十六。

『三井統灯記』一

弘長元年七月十八日、於_二関東_一寂、七十六歳。

㉑審範 園城寺 『史料総覧』五、六三頁

『吾妻鏡』弘長元年(一二六一)九月四日条

四日癸亥。晴。申剋。法印権大僧都審範入滅(年七十三)。熱田大宮司散位季範曾孫、法橋明季真弟子、

顕宗、長舜法眼門弟、最勝講々聴、三会已講。密宗、道禪僧正受法、公縁僧正灌頂弟子。貞永元年鶴岡八幡

宮供僧。入_レ夜、女房帥局審範臨終正念之由、申_二相州

禪室_二之處、為_二哀傷之中御悅_一之由、被_二感仰_一云云。

②隆政『史料総覧』五、七四頁

『吾妻鏡』弘長三年（一二六三）一月九日条

九日庚寅。天晴。来十二日依_レ可_レ有_二御弓始_一。被_レ催_二撰定之射手_一。来十二日辰刻以前可_レ參勤者、左典厩日来御不例、今日御庖瘡出見。及_レ晚権律師隆政入滅（年廿三）。

③澄円『史料総覧』五、八一頁

『吾妻鏡』弘長三年（一二六三）十月二十五日条

廿五日壬申。晴。今夜、中御所出_二御于武州亭_一。御外戚太政法印澄円入滅、依_二御軽服_一也。彼上綱者、光明峰寺禪閣御息、云云。

この記事は宗尊親王（一二四二～一二七四）の御息所が北条長時の邸宅に移った時に、外戚の澄円が入滅したので軽服であったとの記事である。そのため、澄円の入滅は十月二十五日より前ではあるが、これが何時であったかは明確ではない。

④定親 東寺『史料総覧』五、一〇八頁

『吾妻鏡』文永二年（一二六五）七月二十五日条

廿五日辛酉。天晴。法印定親入滅。

『鶴岡八幡宮社務職次第』定親

文永二乙丑七月廿五日、於_二京都_一入滅。

定親については、『吾妻鏡』では文永二年七月二十五日条に記されているにも拘わらず、鎌倉側の史料である『鶴岡八幡宮社務職次第』では、京都での入滅を伝えている。この場合も定豪と同様に、該当日の記事に入滅の記事が記されており、且つ入滅地が明記されていない場合であっても、それは鎌倉での入滅を示しているものではない。すなわち、同記事はその時代に起こった一般的な事実が記されているだけだと判断される。

⑤守海

『吾妻鏡』文永三年（一二六六）一月七日条

七日辛丑。天晴。佐々目法印権大僧都守海入滅（年六十二）。

以上示してきた通り、『吾妻鏡』では、京都で入滅した僧侶は、飛脚・使者・伝聞などの記事が存する場合があります、実際の入滅よりやや遅れて記事になっている。⑥道法⑧公胤⑫貞暁⑭親嚴⑯信恵などがそれに当たる。しかし、京都での入滅を伝える記事があるにも拘わらず、入滅日に記事が収録されている場合がある。⑦榮西⑮定豪⑱定親などである。

『吾妻鏡』が当時の日記なども参照されて編纂されたものであるならば、当然、具注曆に記された日記を参照した場合

性は考慮せねばなるまい。

もあつたと考えられる。その場合、記主が後に知つた記事であつても、入滅日に記されることになる。あるいは、京都で記された日記に基づく場合も同様である。したがつて、『吾妻鏡』の僧侶入滅記事にも、そのようなケースもあつたのではないか。

そのため、定豪・定親の例を踏まえるならば、『吾妻鏡』に記された栄西の入滅記事からのみでは、栄西の入滅地が鎌倉であつたと意図して記されたものであるかを断定することはできない。したがつて、『吾妻鏡』の栄西入滅記事はその時代に起こつた一般的な事実が記されている可能性があり、『吾妻鏡』の栄西入滅記事には、入滅地について明記されていない、というのが最も妥当な解釈と思われる。

以上の解釈を踏まえた上で、何故『吾妻鏡』のみが六月五日条に記されているのかという点についてはなお不明と言わざるを得ない。鎌倉中の諸人が栄西入滅に因んで群集したのは何時であるか、中原親広が將軍家の御使として「終焉の砌」に莅んだのは何時であるかなど、『吾妻鏡』建保三年六月五日条には解決し難い問題が存している。鎌倉中の諸人の群集は、栄西が実際に入滅した七月五日以降でなければならぬだろう。そのため、仮説の一つとして、栄西の入滅に合わせて將軍家の御使である中原親広が鎌倉を出発して京都に向かつた日が、六月五日であつたという可能

『祠堂記』・『元亨釈書』・『沙石集』の栄西入滅記事

大宋宝慶元年（一二二五）八月九日に修職郎監臨安府都税務の虞樗ぐちよが撰した『祠堂記』には、略伝ながら栄西の伝記が収録されている。成立年時は他の栄西伝よりも遙かに古いにも拘わらず、古い時代の写本等が存しておらず、他伝とその内容が異なるという点から積極的に採用されてこなかつたものである。

しかしながら、天隱龍沢の『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」「開山諱拈香」で、『祠堂記』が紹介されているため、文明十四年（一四八二）に同書が建仁寺に存在していたことが確認される。天隱龍沢は、『祠堂記』に記された道元については「永平寺道元乎」としつつも、道元の師である明全（一一八四～一二二五）については「明全何人乎、吾祖伝逸其名、為可惜矣」とあり、明全が如何なる僧侶であるか知らなかつたことになる。また、「吾祖の伝に其名を逸す」とあるため、天隱龍沢は『祠堂記』と他の栄西伝とを分けて認識していることになり、この時点では、『祠堂記』は他の栄西伝とは伝来の経緯が異なつていた可能性がある。

『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」「索話」では「首座曹洞」

とあるため、天隱龍沢が建仁寺に入寺した際には、曹洞宗の僧侶が首座であったことになる。あるいは、『祠堂記』はこの曹洞宗僧侶が建仁寺にもたらしたのもかもしれないが、ここに言う曹洞宗が道元派下か曹洞宗宏智派であるかは明確ではない。いずれにしても、この文明十四年という時点で建仁寺に『祠堂記』が存在したことは間違いない。『祠堂記』には、

臨終預期、副手結印、安坐而化。寿七十五、臘六十二。後十年、其徒明全復来山中、捐楮券千緡、寄諸庫、転息為七月五日忌、設冥飯。衆本孝也。

とあり、『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」「開山諱拈香」では、臨安府虞樗先生千光祖師祠堂記曰、祖師滅后十年、其徒明全復来^①天童、捐楮券千緡、設七月五日忌齋也。

とある。細かな相違が確認されるものの、基となった『祠堂記』は同内容のものと考えて問題ない。栄西の滅後十年、七月五日が入滅日として考えられており、入滅の様子を「臨終の期に預り、手を副え印を結び、安らかに坐して化す」とあり、臨終正念したかの如き様子を伝えていることは、後述する『大乘院具注曆日記』の記事を考える上で興味深い。

なお、『祠堂記』に「年十一出家、延曆寺薙髮染衣、初学俱舍婆娑論。十三受大戒、習天台教觀」とあり、これが『元亨釈書』巻二に、「十一、師事郡之安養寺静心、(中

略)十四、落髮登叡山戒壇」とあることに符合していないという指摘がある。しかし、成立年時や経緯からすれば『祠堂記』の記述は軽視できないと言える。

鎌倉後期に無住道暁(一一二七—一三一一)が撰述した仏教説話集である『沙石集』巻十には、「建仁寺ノ門徒ノ中ニ臨終目出事」と題する項目が設けられ、ここに栄西入滅に関して、

サテカノ僧正、鎌倉ノ大臣殿ニ暇ヲ申テ、「京ニ上テ臨終仕」ト申シ給ヒケレバ、「御年シタケテ、御上洛煩シクモ侍リ、何クニテモ御臨終アレカシ」ト仰セラレケレドモ、「遺世ヒジリヲ、世間ニ賤ク思ヒアヒテ候時、往生シテ京童部ニミセ候ハン」トテ、上洛シテ、六月晦日ノ説戒ニ、最後ノ説戒ノヨシアリケリ。七月四日、明日ヲハルベキ由披露シ、説戒目出クシ給ケリ。人々最後ノ遺戒ト思ヘリ。公家ヨリ御使者アリケルニ、客殿ニシテ御返事申テ、ヤガテ端坐シテ化シ給ニケリ。門徒ノ僧共ハ、ヨシナキ披露カナト思ヒケルホドニ、同キ五日、安然トシテ化シ給ヒケリ。カタム目出カリケリ。^②

という記事が収録されている。一方、まとまった栄西の伝記で成立が最も古い、鎌倉末期に虎関師鍊が撰述した僧伝の『元亨釈書』巻二「建仁寺栄西」に記された伝記には、

三年、西在相州龜谷堂壽福寺。一日、辞源僕射実朝。僕

射曰、師已老、寺未成、何事行乎。对曰、我欲入王城、取滅耳。僕射曰、至人出沒、豈扱地乎。对曰、都人初聞宗門、疑信胥半、我当唱末後句、顯煥王都耳。即命駕歸京。夏、示微疾。六月晦、布薩次、告衆曰、孟秋單五、吾之終也。都下喧伝至宸展。到期、上遣中使問候。西对宮使曰、已近。而姿儀壯健。諸弟子傍聽潛怕。晡時坐椅、安祥而逝。中使未還宮、於塗聞路人譁稱、見瑞虹于寺上、実七月五日也。年七十五、臘六十三。

とある。『沙石集』と『元亨釈書』の文章はかなり似通っているが、細かくみると異なつた記述がみられる。

『元亨釈書』では榮西入滅の記事は、「三年、西在相州龜谷「營」寿福寺」という記事の後に、「一日、辞源僕射実朝」として始まる。「營」の解釈にもよろうが、『元亨釈書』卷二「建仁寺榮西」には「建仁二年、金吾大將軍源頼家施地于王城之東「營」大禅苑」とあり、大禅刹は建仁寺を指しているが、ここでは造営の意味で用いられていることが確認される。『元亨釈書』卷二「建仁寺榮西」では、寿福寺の名が出てくるのは、建保三年が最初で最後であり、榮西伝における建仁寺に対しての「營」の使用例からみても、寿福寺に対して用いられている「營」の字は造営の意味で用いられている可能性が高い。そのため、これを構成通りに解せば、榮西が実朝を辞したのは、建保三年中となる。しかし、

榮西が建保三年に寿福寺を営んだとする記事は、先行研究等でも既に示されてきた如く明らかな誤伝である。

問題は、誤伝とみられる「三年、西在相州龜谷「營」寿福寺」の後に続く「一日」という記事を、果たして建保三年の一日と断定してよいのかという点である。『沙石集』卷十「建仁寺ノ門徒ノ中ニ臨終目出事」は、建保三年とも解釈が可能な記事ではあるが、実朝の下を辞した「一日」について、何年のことであつたかは明記されていない。そのため、『沙石集』や『元亨釈書』の記事をもって、榮西が実際に実朝を辞したのが、建保三年であつたか否かを断定するには至らないのである。

一 誠堂書店所蔵『大乘院具注曆日記』について

『吾妻鏡』の榮西入滅記事が、鎌倉入滅を伝えるものと言えない以上、入滅地は京都というのが記録に残る唯一の説であり異説はない。そのため、榮西入滅をめぐる問題は、入滅日の確定ということに移る。

この榮西の入滅日について、決定的とも言える史料が出現した。それが、『一誠堂古書目録』平成十二年秋号に掲載された『大乘院具注曆日記』である。『大乘院具注曆日記』に「七月五日の臨濟宗祖榮西の入滅を伝える裏書」が存すこ

とが『一誠堂古書目録』に記されており、この記事によって、栄西の入滅日が七月五日であったことが判明したのである。しかしながら、平成二十一年現在、一誠堂書店に所蔵されている『大乘院具注暦日記』は、基本的に公開されていない史料であるため、栄西の入滅について実際にどのような記事が記されているのか公にはされていない。このため筆者は、一誠堂書店の御許可を頂いて栄西入滅に関する記事を紹介するものである。

まず、『大乘院具注暦日記』について、簡略に説明してみたい。『大乘院具注暦日記』とは、南都興福寺の大乘院の門跡や、それに準ずる僧侶が記した具注暦日記の総称である。一誠堂書店が所蔵するのは、この内の一点であり、建保三年の具注暦日記である。そのため、もともとは興福寺大乘院に伝来したものであるが、『大乘院具注暦日記』は大乘院から流出し、数奇な経緯を辿り、各地に所蔵されるに至っている。この経緯については、河野昭昌氏が詳しく考察している⁶⁵ので、これを参考にして、触れておきたい（以下、『大乘院具注暦日記』を総称する場合は『暦記』、一誠堂書店が所蔵する『大乘院具注暦日記』の建保三年の記録を指す場合は『建保三年暦記』と称す）。

宝暦元年（一七五一）、興福寺大乘院家諸大夫である杉田喜昌が大乘院伝来の文書・記録等の目録を作っている。こ

の目録には、『暦記』の記述もあり、その中に「建保三年一卷」、その右にやや小さな文字で「後菩提山殿実御記」とあるのが、現在、一誠堂書店が所蔵する『建保三年暦記』とみられる。宝暦元年の時点では、興福寺大乘院に所蔵されていたのである。

明治二十一年（一八八八）八月十日に、国学者の小杉楹邨（一八三五～一九一〇）が、南都の寺社を調査した際の記録には、「建保三年暦日記」が興福寺に所蔵されていたことを記している。これが、『建保三年暦記』と考えられる。しかし翌十一日の調査では、松園尚嘉（一八四〇～一九〇三）が所蔵している史料として、『建保三年暦記』以外の『暦記』の存在を記している。明治二十一年の時点、『建保三年暦記』は他の『暦記』とは別に興福寺に所蔵されていたのである。

その後、大乘院の文書は流出し、その大部分が、内閣文庫、興福寺、徳富蘇峰（一八六三～一九五七）成實堂文庫の三箇所に分蔵された。『暦記』はこれらの文書とは別に流出し、京都大学付属図書館、東京国立博物館、大東急記念文庫などに収蔵された。しかし、この中にも『建保三年暦記』は含まれておらず、のちに一誠堂書店が所蔵することになったのである。

日記の記主については、『一誠堂古書目録』平成十二年秋号では信円（一一五三～一二二四）と推定しているが、江

戸時代の目録では実尊(一一八〇〜一二三六)とされている。実尊は師である信円から大乘院を付属されているという関係にある。ただし、『建保三年曆記』は詳細な調査が行なわれていないため、記主の確定については今後の研究に委ねたい。

今回調査した『建保三年曆記』の七月五日条の裏書には、

榮西前権僧正葉上房入滅了、臨終正念、七十五才

という記事が収録されている。「云々」とあるから、榮西が入滅し臨終正念したことを伝聞した記事である。そのため、興福寺大乘院にまで榮西入滅の情報が伝わったことが知られる。入滅した際の年齢については、「七十五才」とあり、これは『元亨釈書』を始めとする諸史料と一致した情報である。

『建保三年曆記』の榮西入滅記事の内容が、『吾妻鏡』と相違する点を上げてみたい。一つ目は、『吾妻鏡』が、六月五日条に記されているのに対し、『建保三年曆記』では七月五日の記事としていることである。これは、『吾妻鏡』以外のほぼすべての史料が七月五日としていることと一致している。『建保三年曆記』に七月五日という記事がある以上、入滅日については確定してよいだろう。

二つ目は、『吾妻鏡』では「葉上僧正榮西」とあるのに対し、『建保三年曆記』では「前権僧正榮西葉上房」と表記されて

いることである。榮西は、入滅する前にすでに権僧正の職を解かれ、前権僧正となつている可能性が高い。この点は、従来どの史料にも見られない新しい情報と言える。

三つ目は、『吾妻鏡』では「痲病」とあり、榮西が激しい病で入滅したことが記されているが、『建保三年曆記』では、「臨終正念」という最期を伝えていることである。「臨終正念」とは煩惱が消滅し迷いなく入滅した様を指す。榮西が入滅した理由は『吾妻鏡』にしか記されていないため明確ではないが、少なくとも「臨終正念」という最期が興福寺に伝聞していたことが判明する。この点、『祠堂記』の記述は「臨終正念」とも言うべき様子を伝えている。

『建保三年曆記』によつて、榮西の入滅日は七月五日であつたことが確定したのである。この結果、『吾妻鏡』には、榮西が建保三年に鎌倉で活動していたことを示す記事は一つも存しなかつたことになり、榮西が最晩年である建保三年に京都で過ごしていた可能性が高くなつた。

このことは、榮西の晩年に参学したという伝記が残されている道元の足跡を考察する上で、極めて重要な情報となる。なぜならば、近年の道元研究では、道元が榮西に会うことがなかつたかの如き論が主流となり、しかもその説が無批判に継承されている。その主たる論拠の一つとされていたのが、『吾妻鏡』建保三年六月五日条の記事から、榮西

が鎌倉寿福寺で入滅したとする説であった。

ところが、『吾妻鏡』の記事からは栄西が鎌倉寿福寺で入滅したと解釈することができないのみならず、『大乘院具注曆日記』建保三年七月五日条の裏書の記述によって、入滅日も七月五日であることが確定した。そのため、これまで『吾妻鏡』からの記事を基に考察が進められていた道元と栄西の相見否定説については、再考察する必要があるのである。

禅僧の語録にみられる栄西忌について

栄西の入滅日が六月五日ではなく、七月五日であることが確定したことは、道元のみならず、他の禅僧たちの伝記を考察する上で極めて重要な情報となった。禅僧の語録には、栄西の忌日に行なった上堂が記録されている場合が存する。語録の上堂は多くの場合、上堂が行なわれた順に配列されているために、栄西忌が行なわれた日が七月五日であると確定したことによって、語録に記録されている栄西忌の記述を通して禅僧の活動の一端が判明するからである。幾つかその例を挙げてみたい。

まず、栄西に直接参じていた可能性が存する道元の語録には、栄西忌に行なわれた上堂が幾つか記録されている。『道

元和尚語録』の栄西忌の上堂はその上堂配列から、おそらくは七月五日に行なわれていたと推定されていた。⁽⁶⁶⁾『建保三年曆記』の栄西入滅記事は、この考察を裏付けるものと言えるだろう。

また、『蘭溪和尚語録』にも、蘭溪道隆（一一一三～一二七八）が京都の建仁寺で行なった「開山千光和尚忌上堂」が収められている。筆者の考察の結果、『蘭溪和尚語録』は上堂順に配列されていることが判明しており、⁽⁶⁷⁾蘭溪道隆が建仁寺で行なった『蘭溪和尚語録』の「開山千光和尚忌上堂」は、弘長二年（一二六二）七月五日の上堂であることが確定する。

『兀庵和尚語録』には、兀庵普寧（一一九八～一二七六）が来朝した際のこと、「無錫南禪寺語録」と「建長禪寺語録」の間に記録されており、そのなかに、

師因「日域法眷・道旧郷人、不忘「径山道聚之義」、屢邀「開業」、累却復至、於「景定庚申」、暫与一遊。海缸橋上、龍獻「七大寶珠」、舉衆瞻仰。咸云、東海龍王來迎。繼即順帆、速達彼岸。
 聖福禪寺住持乃法眷。適值「開山千光法師忌辰」、方丈大衆礼請。
 （後略）⁽⁶⁸⁾

とあり、兀庵普寧が渡来して問もなく博多の聖福寺を訪れて滞在していた時、「開山千光法師忌辰」が行なわれていたため、兀庵普寧が請われて聖福寺にて陞座説法を行なった

ことが記されている。また、『兀庵和尚語録』の中において、兀庵普寧は、「日域法眷」と「道旧郷人」が「径山道聚之義」を忘れず、しばしば渡来を促したため、その要請に応じて来日したことを自ら述べている。しかも、この「日域法眷」は兀庵普寧が来朝した時に聖福寺の住持を勤めていたことが知られる。ここでいう「法眷」が誰かは明記されていないが、後段で、聖福寺住持を「聖福法兄」とも記している。次いで、『兀庵和尚語録』には、兀庵普寧が聖福寺に滞在した後、京都東福寺に到着したことが次のように記されている。

師次至_三京東福禪寺、方丈大衆礼請。

陸座（問答不録）提綱、欲_レ識_レ佛性義、当_レ觀_レ時節因緣。時節既至、其理自彰。是故、靈山密付之後、少室单伝以來、諸祖牙興、分_レ宗列派、繩繩有_レ準、的的無_レ私、統焰聯芳、直至_三今日。堂頭法兄、不_レ忘_レ径山師席・義聚・屢承之約、正為提持、癡惰暫導_三來誠、越_レ漠觀_レ国之光、即回_レ旧隱_レ畢_レ殘。既乍到_レ此、（後略）⁸⁹

これによれば、兀庵普寧は京都東福寺に到着し、招かれて陸座している。恐らくは兀庵普寧は円爾（一一二〇—一一二八〇）の案内で博多から京都へ赴いたのだろう。東福寺においても請われて陸座説法を行なったわけであるが、ここでも兀庵普寧は「堂頭法兄」が「径山師席・義聚・屢承之約」

を忘れなかったために来日したと語っている。したがって、聖福寺住持で「法眷」である「聖福法兄」と、東福寺住持である「堂頭法兄」が同一人物であることが知られる。

そのため、ここで言う「法眷」とは、兀庵普寧と同じく径山の無準師範（一一七七—一二四九）に法を嗣いだ円爾のことを指していると考えられる。したがって、兀庵普寧が来朝した南宋の景定元年（一二六〇）すなわち日本の文応元年に、円爾が聖福寺の住持を一時期勤めていたらしい。そして、『大乘院具注曆日記』により、円爾が聖福寺に在って「開山千光法師忌辰」の法要を勤め、兀庵普寧が請われて聖福寺にて陸座説法を行なった日時が文応元年七月五日であり、また兀庵普寧の来日が七月五日以前であったことも確定するのである。

おわりに

栄西の入滅地については、京都と鎌倉の二説があった。これを確かめるべく、これまでの先行研究を調査し、『吾妻鏡』建保三年六月五日条の解釈によつて生じた説であることを明らかにした。そこで、栄西を含めたすべての『吾妻鏡』僧侶「入滅」記事を検証し、『吾妻鏡』の栄西入滅記事をもつて、栄西が鎌倉で入滅したと解釈することが可能であるか

否かについて考察を行なった。その結果、入滅日に記事が収録されている場合であっても、それは鎌倉入滅を確定させるものではないことが明らかとなった。したがって、榮西は京都で入滅したとするのが唯一の説であり、入滅地についての異説はない。

榮西の入滅日については、六月五日と七月五日とする二説があった。『吾妻鏡』建保三年六月五日条の記事とその他の史料である。これを確定させたのが、『建保三年曆記』であり、七月五日条の裏書きに、榮西入滅の記事が収録されていた。そのため、『吾妻鏡』にある六月五日説は否定され、榮西入滅は七月五日と確定したのである。

さらに、榮西の入滅日の情報が確定したことによって、榮西晩年の行実のみならず、道元・蘭溪道隆・兀庵普寧・円爾など鎌倉期を代表する禅僧の行動の一端が確定することとなった。このことは、当時の記録が少ない禅僧の伝記を考察する上では、貴重な成果となろう。

また、榮西の入滅地と入滅日の確定によって、榮西は最晩年に京都で活動していたと考えられる。このことは、その最晩年に榮西に参じたという道元を行実を考察する上で極めて重要であり、これまで『吾妻鏡』に基づき榮西が鎌倉で入滅したと解釈した上で考察されていた道元と榮西の相見問題については、再考察する必要が生じている。この

問題については、その間をつなぐ園城寺僧侶の公胤の詳細な考察が必須であるため、紙面の都合上、別の機会を設け詳しく論じたい。

〔付記〕『大乘院具注曆日記』に榮西入滅の記事が存することは、駒沢女子大学教授の菅原昭英先生と元神奈川県立金沢文庫長の高橋秀栄先生からご教授を頂いた。平成二十一年四月二十四日、一誠堂書店のご厚意により、『大乘院具注曆日記』の閲覧を行なった。調査は、高橋秀栄、林讓、西山美香、佐藤秀孝、館隆志で行ない、諸先生方から多くのご教授を頂いた。

江戸期の鎌倉の史料については前鎌倉国宝館員の三淵美恵子先生からご教授を頂き、閲覧に際しては大本山建長寺宗務総長高井正俊師と寿福寺住持内田穆堂師にご便宜を計って頂いた。記して感謝申し上げます。

- (1) 高橋秀栄『禅僧榮西の二面性』（広瀬良弘『禅と地域社会』吉川弘文館、二〇〇九年）一二―一九頁
 - (2) 『吾妻鏡』建保三年六月五日条（新訂増補国史大系」第三十二『吾妻鏡』前、七一―六頁）
 - (3) 『新編鎌倉志』卷四「寿福寺」白石克編『新編鎌倉志（貞享二刊）影印・解説・索引』汲古書院、二〇〇三年、一四八―一四九頁）
- 『大日本地誌大系』第十九、『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』、雄山閣、一九二九年、八三頁）

- (4) 『鎌倉日記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年)
- (5) 『日本国千光法師祠堂記』(『統群書類従』第九輯上、統群書類従完成会、一九二五年、二七三頁)。また、同書の解説として『群書解題』第二巻、消息部・文筆部・伝部(統群書類従完成会、一九六一年、二四八頁)がある。
- (6) 『洛城東山建仁禪寺開山始祖明菴西公禪師塔銘』(『統群書類従』第九輯上、統群書類従完成会、一九三〇年)二七四―二七七頁
- (7) 駒澤大学図書館所蔵『中巖和尚語録』巻下「拈香」
- (8) 『中巖和尚尚自歴譜』(『五山文学新集』第四巻、東京大学出版会、一九七〇年)六二二頁
- (9) 『黃龍十世録』(『五山文学新集』第三巻、東京大学出版会、一九六九年)二二四頁
- (10) 『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」「開山諱拈香」(『五山文学新集』第五巻、東京大学出版会、一九七一年、七二頁)に、『千光法師祠堂記』の記事が存することは、佐藤秀孝「明全―入宋求法の志半ばに倒る―」(『国文学解釈と鑑賞』第六十四巻十二号、一九九九年、四一―四九頁)に指摘されている。
- (11) 駒澤大学図書館所蔵『月舟和尚語録』「開山祖師三百年諱香語」
- (12) 寿福寺所蔵文書は、『鎌倉市文化財総合目録―古文書・典籍・民俗篇―』(同朋舎出版、一九八五年、八二頁)にて所蔵確認し、寿福寺からの許可を頂き、寄託所蔵先である鎌倉国宝館にて閲覧し、内容の確認を行なった。それぞれの文書の目録番号は、1「寿福寺略記并諸寮地名記」、90「寿福寺開山明庵采西五百五十年諱香贈進状」、82「開山國師五百五拾遠諱助資帳」。
- (13) 『福山常住日記』については、『鎌倉百料「解題」』(鎌倉国宝館、一九九二年、二六八―二七三頁)に詳しい。(鎌倉常住日記)明和元年六月五日条に「来七月五日、開祖千
- 光國師五百五十年忌」とあり、七月四日条に「七月五日寿福之遠諱」とあることよって、采西の忌日が七月五日と判断されていたことが知られる(『鎌倉志料』第五巻、鎌倉国宝館、二五三―二五四頁)。
- (15) 『福山常住日記』文化十一年七月五日条(『鎌倉志料』第十巻、鎌倉国宝館、二八二頁)
- (16) 『禪利記』ならびに『五山記』については、玉村竹二校訂『扶桑五山記』(臨川書店、一九八三年、一一二八頁)を参照されたい。
- (17) 『和漢禪利次第』は、刊行されたものに『統群書類従』第二十八輯上(統群書類従完成会、一九二五年)に収録されたものがある。松ヶ岡文庫に寛永三年(一六二六)に書写されたものがある。引用に際しては、貞享五年(一六八八)に書写された駒澤大学図書館所蔵『和漢禪利次第』にて確認を行なった。
- (18) 『扶桑五山記』四「建仁寺住持位次」玉村竹二校訂『扶桑五山記』、臨川書店、一九八三年)一六八頁
- (19) 『鎌倉五山記』「相摸州亀谷山寿福金剛禪寺」(『統群書類従』第二十七輯下、統群書類従完成会、一九二四年、三八九頁)。「鎌倉五山記」については、『群書解題』第七巻(統群書類従完成会、一九六二年、二九一頁)の解説を参照のこと。
- (20) 『大日本史料』第四編之十三「權僧正法印采西寂ス」(東京大学史料編纂所、一九六八年)六五二頁
- (21) 『沢庵和尚鎌倉巡礼記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年)六頁
- (22) 『沢庵和尚鎌倉巡礼記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年)一三頁
- (23) 年時の推定は、鈴木棠三『鎌倉紀行篇』(東京美術、一九七六年、一一三―一一六頁)「解題」の「玉舟和尚鎌倉記」による。
- (24) 『玉舟和尚鎌倉記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、

- (1976年) 二六頁
- (25) 『金兼菴』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年) 四四―四五頁
- (26) 『鎌倉日記』(鈴木棠三『鎌倉紀行篇』、東京美術、一九七六年) 六八頁
- (27) 国立国会図書館所蔵「建仁寺志」
- (28) 『千光祖師年譜』(『大日本史料』第四之十三、七四七頁)
- (29) 駒澤大学図書館所蔵『千光祖師塔銘拾遺鈔』一八八九年
- (30) 『鎌倉攬勝考』卷四「寿福寺」(『大日本地誌大系』第十九、『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』、雄山閣、一九二九年) 二四二頁
- (31) 『新編相模国風土記稿』卷八十九「寿福寺」(『大日本地誌大系』二十一、『新編相模国風土記稿』第四卷、雄山閣、三三三頁)
- (32) 鷺尾順敬『禅宗史要』、鴻盟社、一九〇一年、一九頁
- (33) 鷺尾順敬『日本仏家人名辞典』、光融館、一九〇三年、六九頁
- (34) 鈴木子順『禅宗眼目』「各本山開祖之略伝」、梅花書院、一八九七年、三〇頁
- (35) 平田真道『在家安心』臨濟宗要義』、光融館、一八九九年、一五頁
- (36) 孤峰智疎『日本禅宗史要』、貝葉書院、一九〇八年、二〇頁
- (37) 『国史大辞典』吉川弘文館(一九〇八年、三二九頁)「栄西」の項目の執筆者は不明であるが、「僧栄西」(郷土教育史料第一輯、岡山県教育会、一九三三)では、この記事が再録され、八代国治(一八七三〜一九二四)の名が記されている。
- (38) 『東山建仁略寺誌』「祖師行状」、建仁寺、一九一三年、五七頁
- (39) 上村観光『千光祖師年譜』(『禅宗』第二百十八号、一九一三年) 四二頁
- (40) 木宮泰彦『栄西禅師』、禅門叢書、第五編、丙午出版社、一九一六年、九六頁
- (41) 伊藤古鑑『栄西』、雄山閣、一九四三年、一二二頁
- (42) 辻善之助『日本仏教史』第三卷中世編之二、岩波書店、一九四九年、八〇頁
- (43) 『鎌倉市史』社寺編「寿福寺」、吉川弘文館、一九五九年、二〇八頁
- (44) 多賀宗集『人物叢書』栄西』、吉川弘文館、一九六五年、一九四頁
- (45) 古田紹欽『栄西』日本の禅語録第一卷、講談社、一九七七年、三二頁
- (46) 菅沼晃『栄西・白隠のことば』、雄山閣出版、一九八六年、二二二頁
- (47) 高野澄『栄西―京都・宗祖の旅』、淡交社、一九九〇年、九六頁
- (48) 『国史大事典』卷十三、葉貫磨哉「明庵栄西」(吉川弘文館、一九九二年、五〇九頁)
- (49) 『吾妻鏡・玉葉データベース』、吉川弘文館、CD-ROM、二〇〇二年
- (50) 『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」(『素話』(『五山文学新集』第五卷、東京大学出版会、一九七一年) 七二四頁)
- (51) 『翠竹真如集』一「建仁寺入寺」(『開山諱拈香』(『五山文学新集』第五卷、東京大学出版会、一九七一年) 七二二頁)
- (52) 『沙石集』卷十一「建仁寺ノ門徒ノ中ニ臨終目出事」(『日本古典文学大系』八十五、渡邊綱也校注『沙石集』、一九六六年) 四五四頁
- (53) 『元亨釈書』卷二「建仁寺栄西」(『大日本仏教全書』第六十二、鈴木學術財団、一九七二年、七七頁)・『国訳一切経』和漢撰述部、史伝部十九、大東出版社、一九三八年、六五頁)
- (54) 『大日本史料』第四篇之六(五二二頁)に「政子、故源義朝ノ

- 遺跡龜谷ノ地ニ、一寺（寿福寺）ヲ建立セントス、是日、事始ノ儀ヲ行フ、尋テ頼朝ノ沼浜ノ旧宅ヲ同寺ニ寄附ス」として『吾妻鏡』正治二年（一一二〇）閏二月十二日条、閏二月十三日条、建仁二年（一一二二）二月二十九日条が挙げられている。寿福寺の寺名が最初に登場するのは、『吾妻鏡』正治二年七月十五日条であり、北条政子が京都より届いた十六羅漢像を寿福寺に供養し、その導師を榮西が勤めたとの記事である。そのため、建保三年に榮西が寿福寺を開いたとする説は成り立たない。『鎌倉日記』は、『元亨釈書』により建保三年を開山年時としているが、『新編鎌倉志』・『千光祖師年譜』・『鎌倉攬勝考』・『新編相模風土記稿』などが、『吾妻鏡』を基にこれを改めている。また、寿福寺について詳しい『鎌倉市史』社寺編（吉川弘文館、一九五九年、二〇一―二〇三頁）においても同様である。
- (55) 河野昭昌「大乘院旧蔵具注曆」の目録と伝来の軌跡」（『堯榮文庫研究紀要』第七号、二〇〇七年、一七七一―一九〇頁）・「翻刻と研究『承元四年信円記』—京都大学付属図書館蔵—」解説（『堯榮文庫研究紀要』第六号、二〇〇五年、一〇三一―一九頁）伊藤秀憲「『永平広録』説示年代考」（『駒澤大学佛教学部論集』第十一号、一九八〇年）一七一―一九七頁
- (56) 拙稿『大覚禪師語録』の上堂年時考—特に元庵普寧の来朝年時を中心に—」（『駒澤史学』第六十六号、二〇〇六年）
- (57) 『元庵和尚語録』（『正統蔵経』第一輯第二編第二十八套第一冊、一八八二年）四頁
- (58) 『元庵和尚語録』（『正統蔵経』第一輯第二編第二十八套第一冊、一八八二年）五頁
- (59) 『元庵和尚語録』（『正統蔵経』第一輯第二編第二十八套第一冊、一八八二年）五頁